《京都》御所と離宮の栞（しおり）

其の十八

― 京　都　御　所 ―

皇后宮常御殿（こうごうぐうつねごてん） 御化粧の間 襖絵「新樹（しんじゅ）」

京都御所内の北側には，皇后宮常御殿（こうごうぐうつねごてん）があります。皇后宮常御殿は，皇后がお住まいになる建物ですが，中宮御殿とも呼ばれ，また女御（にょうご）御殿，准后（じゅごう）御殿である時代もありました。現在の位置に建てられるようになったのは宝永度内裏（宝永6～天明8年〈1709～1788〉）からといわれており，天皇の御常御殿と比較すると，約2/3の面積となっています。

皇后宮常御殿

皇后宮常御殿･御化粧の間

皇后宮常御殿･御化粧の間「新樹」 画：塩川文麟

この建物には，天皇が御使用になる御常御殿と異なり，「御化粧の間」があります。「御化粧の間」は皇后の私的な部屋として使用されました。ここでは，この部屋に画かれている障壁画を紹介します。

御化粧の間は9畳の部屋で，その四方の襖や壁合わせて13面にかけて，塩川文麟（ぶんりん）が「新樹」と題し風景画を画いています。金泥を配した画面に，山の合間を流れる清流，カナメモチなどの常緑樹や桜などの落葉樹合わせて10種類以上の樹木や石が配置され，春から夏へと移りゆく様子が，群青，緑青などの顔料を用いて色鮮やかに画かれています。

文麟は，江戸時代末期から明治初期にかけて活躍した四条派の絵師で，山水図，人物図や花鳥図など，あらゆる画域をこなしました。京都の各派の画家を集めた如雲社（じょうんしゃ）では指導者として活躍し，明治京都画壇の基礎を築きました。安政度御造営（安政2年〈1855〉）の折には，御常御殿の御小座敷（おこざしき）下の間や，安政5年に建造された迎春（こうしゅん）の北の間の襖絵（栞其の六で紹介）も担当しています。

小御所 杉戸絵「伯牙鍾子期」

小御所　杉戸絵「伯牙鍾子期」 画：岸竹堂（模写：西堀刀水）

左の写真の杉戸絵は，中国の故事によるもので，「伯牙鍾子期」と題され，小御所の西廂と御拝道廊下（小御所西廂から清涼殿に続く廊下）の境に填められています。

この題材の杉戸は寛政度内裏（寛政2～嘉永7年〈1790～1854〉）にも同じ場所にあり，安政度の御造営では，岸派4代目の岸竹堂が担当しました(昭和29年〈1954〉に火災により小御所が焼失したため，現在のものは昭和33年再建時に模写されたものです〈模写：西堀刀水〉)。

竹堂は，京狩野派の9代目狩野永岳に絵を学びましたが，粉本（画家が参考にした模写などの手本）を写す形式的な技術だけでなく写生画風の技法を習得するため，岸連山にも指導を受けました。連山は，岸派に四条派の写実的な画風も取り込んでいたため，その指導を受けた竹堂は岸派，狩野派，四条派を折衷したような画風で活躍しました。

竹堂は，連山の養子となり，連山亡き後は岸派を継ぎ，京都画壇の一人として様々な画家を育成するなど活躍しました。さらに，幕末から明治初期にかけての激動の時代には，友禅の下絵を描くなど友禅の世界でも才能を発揮しました。

琴を弾く伯牙

画面の左面に琴を奏でる伯牙とお茶を用意する人物，右面には伯牙の琴を聞いている老人鍾子期が画かれています。

伯牙は，琴の名人で，一方の鍾子期は，伯牙が弾いている音色により，伯牙が何を思い浮かべて琴を弾いているのかがわかる人物でした。そのため伯牙は，鍾子期が自分をよく理解してくれる人物であり，良き聴き手と思っていました。しかし，鍾子期がこの世を去ると，鍾子期ほどの良き聴き手がいないのであれば，琴を弾く意味がないということで，琴を壊して弦も切り，二度と琴を弾こうとしなかったと伝わっています。この故事にちなんだ意匠は，京都の夏の風物詩，祇園祭における山鉾のひとつ「伯牙山」にも見ることができます。

伯牙の琴の音を聞く鍾子期

「伯牙鍾子期」に画かれている琴

小御所障壁画「乞巧奠（きっこうてん）」に画かれている琴

伯牙が弾いている琴は，中国の古琴で七弦琴と呼ばれるものです。周の時代にあったとされるほど琴の歴史は古く，琴に関する故事もいくつかあります。この琴は弦が7本で，音程を調整するための琴柱（ことじ）がありません。現在よく目にする13弦で琴柱のあるものは，本来「箏」と書かれ，小御所の襖絵「乞巧奠（きっこうてん）」に画かれています（写真：中段右側）。中国では古来，琴は「琴棋書画」という四芸の一つに数えられ，教養のある文人のたしなみとされており，古くから画題に取り上げられました。ちなみに，この「伯牙鍾子期」の裏面は「王質（おうしつ）」と題される絵で，そこには棋（碁）を打っている様子が画かれています（写真：下段）。

小御所　杉戸絵「王質」画：岸竹堂（模写：福山峯水）

陶淵明（とうえんめい）を題材とした障壁画などについて

清涼殿「漢詩本文の意」　画：土佐光貞

（参観経路からは見えにくい位置にあります）

御所・離宮には中国の有名な詩人である陶淵明（365－427）にまつわる作品がいくつかあります。陶淵明は，六朝時代の人で，官を辞して隠遁し，田園生活を送りながら多くの詩を残したことから田園詩人と称された人物です。陶淵明の隠逸の士としての生き方や，彼の詠んだ詩は人々をひきつけたため，絵画の題材としてよく用いられました。

左の写真は絹貼りの襖絵で清涼殿母屋にあります。寛政度御造営時(寛政2年〈1790〉)に，土佐光貞が陶淵明の詩を題材として画いたもので，嘉永7年（1854）の火災では焼失を免れ，安政度御造営時に繕われて使用され現在に伝わっています。

襖に貼られた色紙の句は「采菊東籬下（菊を采（と）る東籬（とうり）の下（もと））　悠然望南山（悠然として南山を望む）」です。陶淵明の詩の中で大変有名なものの一節で，ここには陶淵明が家の東の垣根の下で咲いている菊を採って，ゆったりと南の山（廬山）を見ている場面が画かれています（「望」の字は「見」とされることが多いですが，「望」とする本文も古来存在しました）。この絵を担当した土佐光貞は，土佐派の別家（分家）を創設した人物で，大嘗会に使用する悠紀主基（ゆきすき）屏風を画き，寛政度内裏では清涼殿の障壁画を担当しました。

下段の写真は，御常御殿（ひがしごえんざしき）の東御縁座敷にある「陶淵明帰去来（とうえんめいききょらい）」という画題の杉戸絵です。陶淵明が役人を辞めて田舎へ帰る心境を述べた詩「帰去来辞（ききょらいのじ）」を題材としたもので，画面の右側に故郷に戻ってきた陶淵明，左側に陶淵明を待ち受ける妻や子どもが画かれています。この杉戸絵は，森派の森寛斎（かんさい）が担当しました。寛斎は，前述の如雲社に所属し，京都府画学校の教授を務めたり，帝室技芸員となって京都画壇の興隆や門人の育成に努めた人物です。

御常御殿「陶淵明帰去来」　画：森寛斎

修学院離宮（下離宮）寿月観一の間「虎渓三笑」 画：岸駒

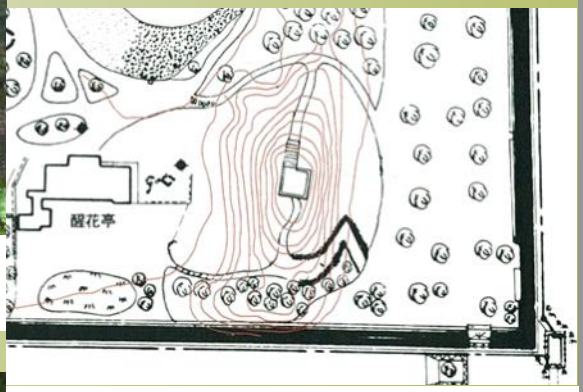
（御殿内の物は模写。写真は収蔵庫で保管している原品）

苑路より悠然台へと続く階段を望む

悠然台（近景）

陶淵明は栞其の二で紹介した修学院離宮・下離宮の寿月観の一の間にある襖絵「虎渓三笑」にも登場します。虎渓三笑は，中国の『廬山記』に記される故事で，東洋画の画題として用いられます。この障壁画では，陶淵明が慧遠という高僧と陸修静（5世紀頃活躍した道士）と話をしている場面が画かれています。

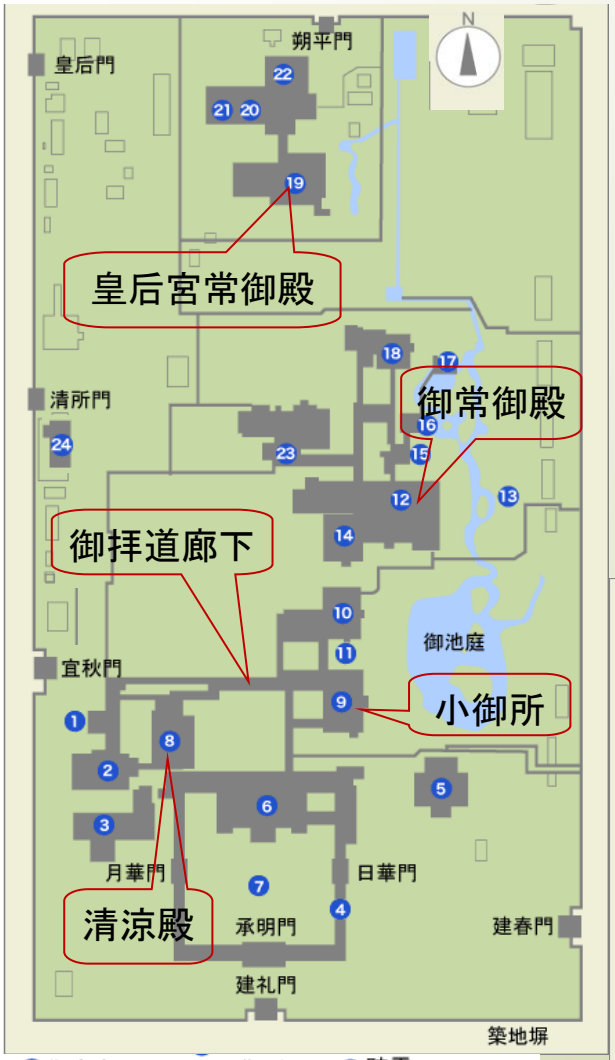
障壁画以外にも，陶淵明に関するものがあります。それは，仙洞御所の庭園の東南隅にある悠然台です。現在は，階段及び建物の基礎部分しか残っていませんが，小高い丘になっており，悠然台からは遠くまで見渡せたことが想像できます（参考：下記図）。悠然台は先ほど掲げた詩の「悠然望（見）南山」から名付けられたとされています。江戸時代に選ばれた仙洞十景の一つに「悠然台の月」があることから，この辺りからは綺麗な景色が楽しめたものと思われます。



等高線を用いた図（等高線：色線50cm間隔）

悠然台が画かれる絵図（京都事務所所蔵）

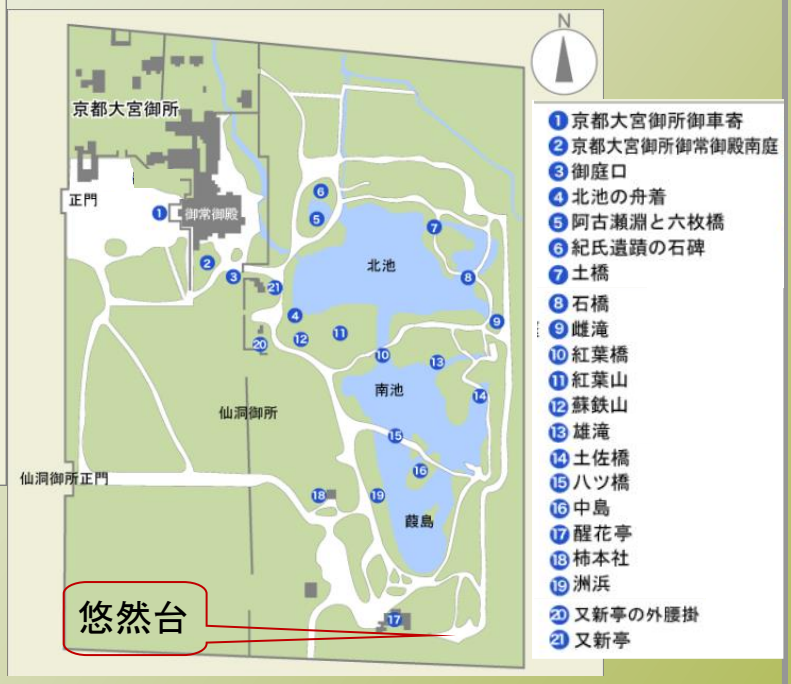
京都御所案内図



1 御車寄
2 諸大夫の間
3 新御車寄
4 回廊
5 春興殿
6 紫宸殿
7 南庭
8 清涼殿
9 小御所
10 御学問所
11 蹴鞠の庭
12 御常御殿
13 御内庭
14 御三間
15 迎春
16 御涼所
17 聴雪
18 御花御殿
19 皇后宮常御殿
20 若宮御殿
21 姫宮御殿
22 飛香舎
23 参内殿
24 参観者休所

修学院離宮案内図

仙洞御所案内図



観マークは，参観でご覧になれます。 申込み方法は， http://sankan.kunaicho.go.jp/ をご覧ください。

内マークは，通常公開していない場所にあります。

通マークは，申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。詳細は，http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.htmlをご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については，
宮内庁ホームページのこちらからご覧ください。

＜問い合わせ先＞
〒602-8611　京都市上京区京都御苑３
宮内庁京都事務所　代表電話：075-211-1211
参観係直通電話：075-211-1215

其の十八：平成29年12月21日発行